

薬草園の花だより

第13号

2018年(平成30年)9月28日発行

■第13号に寄せて

酷暑の夏、強い台風、大地震、そしてとてつもない大雨と、わが国の自然の厳しさを嫌という程味わった夏でした。かなり心配したのですが、薬用植物園の植物たちは、強風や大雨にも全くひるまずに悠々と育っています。暑さ寒さも彼岸までと言われる通り、この頃はめっきり涼しい日もあり、キンモクセイの香る時期になりました。

彼岸といえばまさきにヒガンバナ(彼岸花)が思い浮かびます。ヒガンバナには実に多くの異名がありますが、その中でも最も有名なのは曼珠沙華(まんじゅしゃげ)でしょうか。この名前は法華経の「曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼珠沙華・摩訶曼珠沙華」から出た名前だそうで、曼珠沙華とは「天上に咲く赤い花」という意味(曼陀羅華の方はチョウセンアサガオの異名)。ヒガンバナは縁起が悪いので庭に植えるものではないと言われたこともあります。近年は人気急上昇。埼玉県巾着田(きんちゃくだ)の見事な花も有名になりました。写真のように紅白で植えられたらもうほとんど暗いイメージはないでしょう。



紅白のヒガンバナ



クズの花びら

秋の七草と称されるものが知られており、これは『万葉集』

に収載された山上憶良による「萩の花尾花葛花なでしこの花女郎花また藤袴朝がほの花(巻八、一五三八)」が起源です。この中にあるクズ(葛)の花はなかなか魅力的できれいなものです。クズの花を題材にして歌った折口信夫(おりくちしのぶ=釈超空(しゃくちょうくう)1887-1953)の「葛の花踏みしだかれて色あたらし この山道を行きし人あり」はとても印象的です。先日、新しく造られた薬用植物園内の林内の園路を歩いてみたところ、鮮やかな紫色をしたクズの花びらが地面に散っていました。見上げるとはるか頭上でクズが花をつけています。(船山)

■今咲いています・見頃です

《センニンソウ》

温室の東棟の南側の圃場にてセンニンソウ(キンボウゲ科)が満開です。先月からこの仲間の園芸植物であるテッセンの紫色の大輪の花が咲き始めていましたが、センニンソウの方はわが国の山野にも自生する植物です。小輪ですが、実に多くの花を付けて、テッセンやカザグルマなどとはまた別の魅力があります。センニンソウの名前は瘦果に付く綿毛を仙人の髭に見立てたことに由来します。



センニンソウ

この植物の花言葉は「あふれるばかりの善意・美しい心・安全・無事」だそうです。実は、この植物にはプロトアネモニンという刺激物質を含み、莖葉から出る汁が皮膚に付くと水ぶくれを起すことがあります。みだりに触ることは避けた方が無難のようです。別名をウマクワズ(馬食わず)といい、馬や牛が口にしないことが知られていました。かつてはその根を発癌薬として使用されたことがあったようですが、現在はほとんど使われておりません。近縁の植物にボタンツルがありますが、この両者は葉の形を見れば容易に区別がつけます。センニンソウの葉は卵形の葉であるのに対して、ボタンツルの葉は三出複葉でボタンに似た、縁が鋸歯となった葉をつけます。

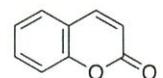
《フジバカマ》

フジバカマは冒頭にあげた「秋の七草」のひとつでもあります。この植物は『万葉集』が成立する以前にわが国に渡来して一般的になったと思われる帰化植物ですが、現在、わが国にては絶滅危惧種のひとつ



フジバカマ

となっています。渡来~帰化~繁栄~絶滅の運命をたどりつつある植物ともいえましょうか。なんとか、是非、踏みとどまっていたきたいものです。フジバカマはキク科の植物ですが、別名を蘭草(らんそう)といいます。「キク科植物なのに蘭?」と言われそうですが、フジバカマを乾燥させるととても良い香りを発するためにそのような命名がなされました。その香りの主成分はクマリンです。クマリンは桜餅のあの香りでもあります。今、フジバカマは薬用植物園では、温室東棟の東側の圃場で咲いています。



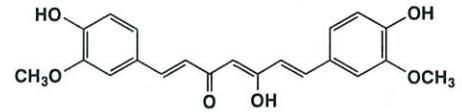
クマリン

《ウコン》



ウコン

温室の西棟でウコン（鬱金）が咲き始めました。ウコンはショウガ科の植物で、その根茎が使われます。カレーの香辛料兼色素として私たちにも馴染み深いもので、その主成分としては、クルクミンが知られています。温室の西棟には先に紹介したところのあるゲットウ（月桃）など、種々のショウガ科の植物が植栽されています。ショウガ科にはきれいな花を楽しめるものも多いです。是非御覧ください。



クルクミン

■ 最近の他の植物写真から（４）

キャンパス内あるいは周辺にて最近撮影した植物写真から、薬用か否かにかかわらず、いくつか選び出してみました。今年の図書館前のパンパスグラスを御覧になられましたか。本当は大きな白い穂を出す雌株だけを植えたかったのですが、3年前に3株入手したところ、そのうち2株は赤っぽいやや小型の穂の雄株でした。そこで、昨年、雌株だけ残して雄株を処分したつもりでしたが、まだ雄株も残ってしまった（むしろ雄株の方が優勢）ようです。

薬用植物園にてコキア（別名：ホウキグサ）が大きく育っています。これから晩秋にかけての紅葉がとても楽しみです。また、キャンパスのあちこちでヘクソカズラというなんともかわいそうな名前がつけられた植物の可憐な花が見られます。別名をサオトメバナというのですから、なんとかこちらを本名にしたいもの。ただし、その茎葉、そして、これから実る果実をつぶしてその臭いを嗅げば、ヘクソカズラの命名理由がはっきりとわかります。果実をつぶしたものがかつて霜焼けの民間療法に使われました。イワギボウシの花を接写してみました。こんなに綺麗なものだとは思いませんでした。



パンパスグラス



コキア



ヘクソカズラ

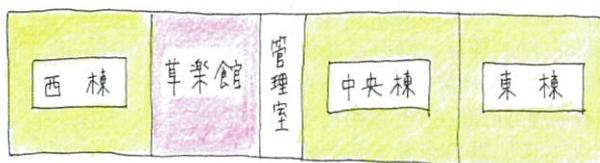


イワギボウシ

■ 薬用植物園からのお知らせ

《温室の各ブロックの呼称》

これまで、この『薬草園の花だより』においては時おり、「温室内東側」というような表現を使ってきましたが、場所をよりわかりやすくするために、温室の5つの各ブロックに名前を付けて呼ぶことにしました。東側（志久駅側）から、東棟・中央棟・管理室・草楽館・そして西棟です。このうち、植物が植栽されているのは、東棟・中央棟・西棟となります。薬用植物園の温室の中央の部屋は「草楽館」と呼ばせていただき、薬用植物園の観察が終わったあとに大きなテーブルでお茶したり、場合によってはゼミもしたりという空間として活用していただきたいと思います。なお、「草楽」とは「薬」の字を上下に分解したもので、「草（植物）を楽しむ」と掛けています。



日本薬科大学薬用植物園温室内の呼称

(下方が出入り口/イラストは野本有香さんによる)

発行：日本薬科大学薬用植物園管理運営委員会
委員長（薬用植物園長）／船山信次
副委員長／山路誠一
委員（教員）／野口博司・西川由浩
新井一郎・系数七重
委員（事務）／今村隆・笹井彰・鈴鹿和子
土屋翔太郎・佐藤智恵・黒木重夫
オブザーバー／野本有香（薬用植物園）